

水循環都市東京シンポジウム

東京理科大学 工学部第一部 建築学科 教授 **宇野 求**

水循環都市東京シンポジウム

—5大学連携リレーシンポジウム

2020年、オリンピックとパラリンピックが東京で開催される。半世紀ぶり2度目の開催であり、次の時代に向けた都市の環境改善のため、この機会に東京の都市構造の更新を図ろうとする動きも盛んである。

本稿では、理科大も参加協力してきた動きの一つ、「水循環都市東京」に向けた建築系教員の地域貢献活動の一端を紹介する。東京理科大学総合研究院の先端都市建築研究部門の活動として、工学部建築学科教員有志によって実施されたものである。

巨大都市東京は、多摩川水系、荒川水系、利根川水系の下流部に位置するアジアでも有数の「水都」であり、その経済社会活動は、治水（防災面）と利水（生活と産業と環境保全の面）による、ダイナミックな「水循環」で成り立っている。課題も多く、例えば、オリンピックのマラソンコース沿いに位置する「外濠」は夏季には悪臭が漂い、東京の各地ではゲリラ豪雨による浸水も頻発、都市圏全体としてヒートアイランド化も進行している。首都直下型地震が発生した際の防災水利面で盤石とは言えない。

こうした現状のある一方、東京の前身である「水都」江戸は優れた水循環システムを備えた都市であったことが知られている。例示した課題を解決するために、動力を要しない玉川上水を現代に活かすことはできないか、一つの策として江戸東京の都市遺産とも言い

得る自然勾配のこの水路を活用できるのではないか、そうした可能性について中央官庁技官、大学の学識者、実務者ら専門家の中で議論が交わされてきた。

専門分野が土木工学、建築学、都市工学にまたがる統合的・学際的な内容であり、東京理科大学、中央大学、法政大学、日本大学、東京大学の5大学による連続シンポジウムを開催して、多角的に検討と議論を重ねることになった。

連続シンポジウムは、水系再生に向けた機運醸成を図ることも目的とされた。後援は、水文・水資源学会、土木学会、日本建築学会、日本都市計画学会、日本造園学会、内閣官房水循環政策本部事務局、国土交通省、独立行政法人水資源機構、特定非営利活動法人日本水フォーラムである。

河川工学の第一人者である中央大学理工学部・山田正教授（同連続シンポジウム実行委員長）のもと、第1回シンポジウムは、2014年12月末、中央大学にて、「玉川上水の機能を活かして水都東京を造る」と題して開催され、筆者を含めて、河川工学、土木工学、建築学などの専門家ほかが発表、5大学のメンバーが討論を行った。第2回は、2015年1月、法政大学で「水都東京をつくる外濠の新たなイメージ」をテーマに学識者とまちづくり活動のリーダーらが各々の立場から研究発表して活発な議論を行った。第3回は、2015年3月に、日本大学で「自然と歴史を活かし、災害に強い美しい世界の水都東京を造

る」をテーマに発表を行い、防災と美しい都市空間の創造の両面について議論を行った。そして、第4回シンポジウムは、2015年5月下旬、東京理科大学神楽坂キャンパスにて開催された



第4回シンポジウム

(東京理科大学神楽坂キャンパス)

パネラー：左から宇野、伊藤裕久 教授、岩田 日本橋四之部連合町会長、吉田 日本橋100年ルネサンス計画委員会幹事長、渋谷 神楽坂組合会長、飯田 龍公亭社長。

「水都東京に向けて ～まち・かわ・ほり」と題したシンポジウムで、文化庁の審議会委員を務めアジア都市史、日本建築史の第一人者である本学工学部第一部建築学科の伊藤裕久教授が、基調講演「江戸東京と日本橋川、神田川、外濠」を行い、日本橋地域および神楽坂地域で家業を営んできた老舗^{あるじ}の主で長年地域を育て維持し護ってきた方々を招いて町と川と堀について語っていただいた。

第5回は、2015年8月、東京大学駒場リサーチキャンパスにてシンポジウム「オリンピックと水 ―東京から世界へ」を行い、首都東京の治水について、これまでの50年とこれからの50年を議論した。

合わせて5回のシンポジウムを通じた検討と討議の結論として「水循環都市東京宣言2015」を発表。オリンピック、パラリンピックで来日する海外の人々に品格ある「水都東京」を披露し、美しく安全な東京再改修の可能性を提示した。

さて、本稿では、東京理科大学が担当し、理科大神楽坂キャンパスで開催した第4回シンポジウムの内容について簡単に紹介する。

理科大では、東京を代表する日本橋地域と神楽坂地域で伝統と現代の融合したまちづくりのための調査研究活動を行っている。その知見を交換する目的で、建築と都市の専門家および市民が意見を交わし、環境の質と都市

文化について考えるディスカッションを行った。代々、江戸東京の文脈を尊重して店とまちの文化を護り継承してきた方々、日本橋から2名、神楽坂から2名、歴史を含めた生活面と文化面からまちと川と堀の関係について貴重な話題を提供していただいた。2つの地域は、玉川上水、外濠、神田川、日本橋川を通じて、ひと続きの水系に位置する町である。こうした土地に400年かけて展開してきた江戸東京の町と水辺の関係を捉え直し、現代の都市開発に資する現地の詳細な文化的知見を蓄えることが、このシンポジウムの目的だった。

基調講演「江戸東京と日本橋川、神田川、外濠／日本橋と神楽坂」

伊藤裕久教授は、江戸東京の都市空間の形成プロセス研究、都市史、建築史、保存・再生計画の第一人者で、文化庁文化審議会専門調査会委員、荒川区文化財保護審議会副会長などを務め、学識者として社会貢献活動を行っている。シンポジウム当日は「江戸・東京と日本橋川、神田川、外濠／日本橋と神楽坂」というテーマで、その成り立ちについて基調講演を行った。富士山を背景とする江戸時代後期の巨大都市江戸の風景「江戸一覧図」に水辺の風景として丹念に描かれた大川（隅田川）、江戸の郭内と郭外を分割する神田

川、郭内の中心を流れる日本橋川についての話題、日本橋川、神田川、外濠を想定しつつ江戸の町の風景について、道を含むまち並みの風景、地先として河岸^{かし}ごとに異なる川の風景、基本的に郭内と郭外を分かち装置である堀の風景の3つに整理した上で、それらを前提に日本橋と神楽坂について解説。

以下は、伊藤裕久教授 基調講演の要旨である。

江戸図屏風には日本橋の荷揚げの様子が描かれている。富士山、江戸城の天守、筑波山、湯島台などランドマークの眺めをもとに都市計画がほどこされていたことが分かる。角地の3階建城郭風町屋の配置も眺めにむけた風景計画がされており、江戸の中心地には眺めにもとづく都市計画の風景があったことが分かる。他方、河岸の風景は、江戸時代を通じて徐々に形成された。四日市河岸には有名な土手蔵や船宿があった。魚河岸には魚納屋があり、西河岸には荷揚げ場、土蔵などがあつた。地先に権利があり、各町との関係で個性的な河岸が誕生した。明治のはじめに河岸は完全に公有地化され地先権が否定されていった。河岸は独立した土地として認められて独自の発展をする。

日本橋は、帝都東京の中心で洋風の近代的都市景観を目指したため、河岸の風景も大きく変わった。三菱の倉庫ができ、明治末に日本橋の付け替えが行われた。建築家妻木頼黄による新しい橋がデザインされ、大正期には、あわせるように日本橋通りの西側に三越や帝国清和ビルなど塔屋をもつ洋風建築群ができ、街並みの状態が洋風化した。大店のある対面は江戸時代の街並みが部分的に残り、伝統と近代が同居する街になった。近代日本橋の特徴である。新道通りは街区の中に残され市場関連の老舗のいくつかが店を構え続け、現在も市場のヒューマンスケールが残されることになった。

神楽坂は外濠の外側の町だが、起源は外濠

ができる以前にある。自律した古い町で、中世以来の古い八幡—筑土八幡、若宮八幡、市谷八幡が、牛込台地の突端に配置されている。戦国時代には天台宗の菩薩である行願寺や牛込城が台地の上に築かれ、外濠から離れた谷合いに、コンパクトな戦国期の城下を形成したと思われる。江戸城の建設にともない郭内にあつた寺院群が移転、横寺町のような寺町や武家地が形成された。家光と親交のあつた酒井藩の下屋敷が矢来町にあり、江戸城をむすぶルートができ、牛込御門が完成。外濠ができあがる寛永13年までにはほぼ神楽坂は骨格を形成していた。

明暦の大火後の17世紀の後半、江戸は大きく都市改造され、郭内にあつた尾張徳川藩の上屋敷が市ヶ谷に移された。尾張藩の移動にともなって物資のルートが設けられ、牛込揚場がつくられ、それ以降、町と川や堀とは密接なつながりができた。浮世絵を見ると、市ヶ谷八幡の門前には、葦簀張りの仮設の茶店などが描かれていて、水辺を盛んに利用していた様子が伺われる。幕末には、たくさんの仮設の建物や置場があつた。堀端地先に三十数ヵ所の床店などの仮設店舗や番屋、資材の置場が展開された。

近代には、大半は武家地だつた神楽坂が花街へと変化していく。

まとめると、江戸では町の地先という考え方が水辺にあって、互いの密接な関係、都市生活に密着した景観を生成していた。近代になると、河岸地は公有地化されて、独立した場として発展、やがて払い下げられていった。近代的な都市景観への変容がみられる一方、部分部分に町場の遺伝子が継承されていて、個性を持ち続けた姿を垣間見ることが出来る。歴史家の立場からすると、そうした姿を丹念に掘り起こしながら、まちとの関係から個性ある川と堀の風景を再構築していくことが望ましいと考えている。

江戸東京 まちと水辺

一日本橋・神楽坂から

シンポジウムでは、東京を代表する伝統地域の日本橋と神楽坂の老舗のご主人であり地域のリーダーの方々による講演が続いた。紙面の都合から、それらを要約して紹介する。

ゲストは、以下の4名の方々。

岩田博さん：昭和19年、日本橋横山町生まれ。日本橋四之部連合町会長。衣料品問屋「株式会社富士商会」代表取締役社長。日本橋横山町町会長、日本橋100年ルネサンス計画委員会副会長。

吉田誠男さん：昭和23年、日本橋小舟町生まれ。400年あまり続く老舗「伊場仙」社長。日本橋みゆき通り街づくり委員会会長。日本橋100年ルネサンス計画委員会幹事長。

渋谷信一郎さん：昭和11年、神楽坂生まれ。昭和10年から続く料亭「千月」ご主人。神楽坂組合会長。

飯田公子さん：昭和24年、神楽坂生まれ。老舗中華料理店「龍公亭」代表取締役社長。幼稚園から高校まで白百合学園で学び、白百合女子大学でフランス文学専攻。

〔岩田博さんの講演要旨〕

日本橋の横山町で生まれ育った。70年間、横山町に店があり今の住まいは国分寺。玉川上水に毎日親しんでいる。横山町は、隅田川にかかる両国橋のそば。橋のたもとにある日本橋中学を卒業した。かつて近所の柳橋には花柳界があった。日本橋には、浜町もあるし、芳町もある。東日本橋、浜町は東京において最もレベルが高い花街だった。

竹橋の神田川の角から蔵前橋までに至る川べりは高級料亭がズラッと並び、町を歩いていると三味線の音が聞こえ綺麗なお姉さん方の姿を見ることができた。

高度成長期になると粋な遊びをのんびりとやるような時代ではなくなってきた。会社の大先輩に柳橋最後の料亭に連れていかれたが

大きな部屋を3～5人で利用する状況。こういう商売が成り立つわけがない。名前は残っているが柳橋に料亭は一軒もなくなった。悲しいことだ。まちと水辺のつながりでは、隅田川（大川）との関係性から文化が栄えたことを実感している。

地域には5月から8月の4ヵ月間を川開きとする習慣があり、そのなかで花火が行われるようになった。戦後、昭和23年7月下旬に両国橋で川開きが催行され、その主催者は柳橋の料亭組合だった。行政でもなければマスコミでもなく、地場で商売をしている料亭組合が、江戸時代から戦前まで続いていた花火の行事を、大変な苦労があったと思うが、再興された。以来、13年間続いた。料亭組合は、両国橋の浜町端、料亭の前に栈敷を作り、船を浮かべていた。いい風情だった時代で、自分が通った中学では校庭の半分に栈敷にして、当時の担任の先生はそこでビールを売っていた。河川の水質悪化で、花火は昭和36年に中止になった。上流の工場排水の垂れ流しで、当時、隅田川は悪臭がしていた。

〔吉田誠男さんの講演要旨〕

店は、うちわや扇子などの和物を商っている。江戸に来た最初期は水辺の開発をしていた。浜松市に伊場町という町があり、尾張屋とか駿河屋と同じように出身地から名前をとって伊場屋といていた。

1590年家康が江戸に入り一緒に入った。日比谷は入江で家康が埋め立てた。東日本橋辺りには湿地帯があり、その辺の埋め立てを我々がやった。三河（現在の浜松）から3万人が家康とともに、今の日本橋、大伝馬町、小舟町辺りに住居を移して、江戸の開発を行った。江戸前島（こまき）という半島が現在の日本橋にあたる場所である。外濠、平川、今の神田川、千鳥ヶ淵……溜池があり湿地が多い江戸は水だらけの町だった。入間川が今の隅田川。日比谷入江、不忍池、秋葉原の南側にはお玉が



日本橋（東京名所） 絵葉書より



柳橋 東日本橋2丁目町会より

池という湿地帯がある。

江戸湾の開発を行い三角州に我々が住み着いた。店は今の小舟町2丁目にあった。三角州を埋め立てて西堀留川と東堀留川を作ったと言われている。ここが日本橋の水運の中心で江戸湊から東堀留川、西堀留川にたくさんの船がのぼってきた。土蔵が並び、物資を揚げていた。江戸の町は水辺に沿ったまちづくりをしていて、材木町から木材を揚げて江戸市中に収められていた。魚河岸もあった。堀留は繊維関係。西堀留川は薬品関係の会社がたくさんあるが、薬品、染料、漢方薬が、西堀留川を使って全国から集められた。

日本橋の周辺、つまり江戸は縦横無尽に、運河が張り巡らされていた。大伝馬町本町通りがメインストリートで富士山を見ることができた。

〔渋谷信一郎さんの講演要旨〕

伊藤先生の話にもあった「花街読本」(昭和12年)はよくできている。戦後の組合長が中心となって出した本。今でも十分に通用する神楽坂の教科書である。座敷だけでなく料理、しつらえマナーなどが書いてある。その中に、料理屋の待合・芸者置屋についての記述があり、序には「春は柳の袖、夏は堀の、牛込の……」と書いてある。

昔はお堀が青々とした藻で綺麗だったのではないか。ボートも盛んで、多くの人がボ-

ト乗りを訪れた。弁慶橋にも乗り場があった。神楽盛りという歌があって「やれこぎましょか、いーそいーそこぎましょか」という歌がある。花柳界とお堀のつながりは、こうしたことである。

若い頃の記憶では飯田門の左側には、揚げ場という船でずっと運んで来て商いするお店、材木店、自転車屋、漕運店などが、ずっとあった。灘から千石舟で東京湾にきて積み替えてここまで来たのだと思う。船宿もあった。私も確か夏目漱石の随筆で読んだことがある。早稲田の夏目坂にお住まいでうちの女の子が芝居に行くのにまだ明けきらぬ間に暗いうちに、歩いて神楽坂まできて、それから船にのって大川まで出て、それからさかのぼり、土手八丁で有名な店にいて猿若座で芝居を見たと書いてある。お堀は交通手段としてとても重要だった。

知り合いの銀座の旦那さんに教わったが、堀の多い銀座では古い映画館にもボートが置いてあった。そこから、猪牙舟という底が平になっている細長い高速船に乗って柳橋、浜町あたりに行きました。着いた料亭の裏側は船着き場になっていて、舟から座敷にあがるのはなんとも情緒があって良かった。銀座も全部周りは川だった。花街は川のそばにできたところが多く、船遊びがとても多かった。そういう情緒がなくなってしまったことは本当に残念。

〔飯田公子さんの講演要旨〕

神楽坂の中華料理店「龍公亭」は、初代が「あやめ寿司」として神楽坂に開業したのが明治22年。辺りには政府重鎮、学者、実業家の邸宅が並ぶ屋敷町が形成されていた。

牛込町誌の中に書かれている地図によると、震災前には劇場が4カ所、寄席が2カ所、貸席などがあった。穂積家は、渋沢栄一の娘である歌子の結婚に際して、渋沢栄一が買い与えた土地でして、今も払方町にある。渋沢の孫が編纂した「歌子日記」がある。船がまだ主要な交通手段で、船に乗って芝居見物や花見に行くのが楽しみだった様子がよく分かる。渋沢栄一の長男、渋沢貴嗣の写真集の一枚には船遊びに行く時に船に乗り込む様子が捉えられている。

昭和13年に市ヶ谷八幡で両親の結婚式が行われた。市ヶ谷八幡は太田道灌が江戸城の守り神として開いた神社。高台にあって、そこから御堀と江戸城を望む風光明媚な場所として大変有名だった。江戸時代には一番人気のある場所で癒しの場であって行楽の場だった。

昭和28年から昭和42年まで九段下の学校で学んだ。土手公園の思い出が鮮明にある。今は外濠公園と呼ばれているが、子供の頃は土手公園と呼んでいた。一人っ子だったので、従兄弟のお兄さんが遊びに来たとき、坂下でボートに乗って遊んでもらった。昭和30年から昭和48年までは高度経済成長期で、護岸工事が進み、船は船着場を失い、川沿いの料亭も商売替えしたり、新幸橋が姿を消したのは昭和42年ごろ。昭和39年には東京オリンピックがあった。昭和44年に、飯田橋ライオンズクラブが創立10周年記念のときに外濠に桜を植える事業をした。神楽坂ライオンズクラブもお手伝いした。

自然地形を利用して水を配らせた江戸のま



第4回水循環都市東京シンポジウム会場
東京理科大学神楽坂キャンパス

ちづくりは素晴らしい。世界の美しい都市は川を中心にして発達したことを知った。この風景は外国人にとっても心地いいはず。オリンピックに向けて堀を整備することは大変素晴らしいことと思う。飯田橋から市ヶ谷にかけて外濠の景観を保つのはとても大事なこと。江戸時代からこの景観を守ってきた先人たちの思いを受け継いでいかなければならない。外濠の水質問題とか周辺の環境問題は、専門家の皆様にお任せするが、神楽坂に生まれ育ち神楽坂を愛する人間の一人として、50年後、100年後にもこの地域が人間に優しい心癒される地域になることを祈りたい。

まず外濠を中心とした水辺の環境の整備が不可欠ではないか。

地域研究と社会貢献

本稿では、理科大建築系教員による地域研究活動・地域貢献活動の一端を紹介したが、紙数が尽きた。研究と現場の事象、活動との関係については、機会を改めて報告できればと思う。

いずれにしても、2020年を控え、東京の都市計画と都市経営は、大きな過渡期を迎えている。理科大は東京都心をホームとする東京の大学であり、地域および行政機関から、地域研究の成果を社会貢献として還元する活動が期待されている。理科大建築系としては、教育・研究に加えて、引き続き、社会貢献・地域貢献の活動を担っていきたいと考えている。